

財団だより

多摩川

2003.12 第100号



舟用の錨
川辺昭吉郎蔵



河川生態学術研究会・多摩川実験地のカワラノギク ('03.11.15)



■多摩川現風景■

(56) カワラノギク

かつて多摩川の草花のシymbol的存在であったカワラノギクは現在レッドデータブックでは危急種とされている。多摩川のカワラノギクの固体群の占有面積は1976年に13.5ha、1984年に2.2ha、1993年に0.8ha、1995年に0.3ha、と減少し続けていて絶滅の危機にある。(右記研究成果No.190による)

「河川生態学術研究会多摩川グループ」(代表・小倉紀雄)では多摩川・永田地区の河川敷実験地で2001年よりカワラノギクの復元のために播種・育成実験を行っており、自然発芽を含め順調に固体数が増加しているという。また、「はむら自然友の会」(代表・岡崎学)では1994年より羽村地先の多摩川河川敷でカワラノギクの保護・育成に取り組んでいる。

こうした方々の努力が実り、活動の輪が広がってけば、かつての多摩川が甦ることも夢ではないと思う。

・関連する財団の研究助成

<学術研究>

- ① 多摩川河川敷の固有植物群落構成種の生活史と存続に関する研究
1994年 井上 健 信州大学 (No.162)
- ② カワラノギクの固体群と生育環境の復元についての研究
1998年 井上 健 信州大学 (No.190)
- ③ 多摩川の絶滅危惧植物の回復を目指した復元生態学的手法の開発
2001年 小堀洋美 武蔵工業大学 (No.224)

<一般研究>

- ① 住民の眼で見つけた多摩川の30年—蓄積データ解析による自然の変遷と自然観の変化についての研究—
2002年 柴田隆行 多摩川の自然を守る会 (No.135)
- ② カワラノギクの保護・育成のための実践的研究
2003年 山田半三郎 はむら自然友の会 (No.143)

私と多摩川



「改架中の神代橋」(昭和39年2月)

都市史研究家 鈴木 理生

私にとっての多摩川は「行きずりに眺め続けた」川であり、その流域の住民として暮らしたり遊んだりした事のない川である。けれども玉川上水で産湯を使った事は紛れもない事であり、物心ついてからの遠足・見学そして行楽の回数は、昭和一ケタに始まりほぼ七十年程の付き合いがある。

その中で「環境浄化」に関係する場面を思い出してみると、昭和七年に「大東京」が発足した前後に開発中の二子玉川園の沿岸へ運動会でいった事がある。砂利採掘場のとなりで水も会場も人間も渋谷駅前も黄土色一色だった記憶がある。

多摩川と浅川の合流点南岸の七尾村落川(現日野市)に麴町区(現千代田区)の郊外施設があった。電車を下りて施設に向かう道の両脇の田圃の中に二メートルほども吹き上げる自噴井が幾つもあった。クヌギ林の中に豊かな澄み透った水を流す水路が何本も流れていた。街中の子供たちは歓声を挙げてその水と戯れた。しかし田圃や林を抜けて大きな川の土手に上がると、大きな川は葛湯のような膜を張って澱んでいた。

戦争がはじまって二年目の夏、《教練》で大國魂神社～分倍河原～関戸橋～聖跡記念館と歩き、帰りは関

戸橋のかかる河原で土地の人が鮎をとっている傍で水遊びした。砂利の上は熱すぎるが川の中は冷たくて長く入ってはいられなかった。それより印象的だったのは、引率者の「軍の秘密だが多摩川では関戸橋が戦車を通せる唯一の橋だ」という説明が忘れられない。

昭和十七年春、京王多摩川(遊園地・百花園、後に競輪場など)でボート遊びして、渡し守が操る渡しで多摩川を越えて稲田堤から「多摩の横山」の北斜面を歩いた事がある。多摩川と幾つかの用水や小川の水は、桜に彩どられて美しかった。

調布からその渡しの上を経て橋本まで鉄道が開通したのは六十年後の事だった。まさに夢である。

戦後では青梅線日向和田駅の西のコワイ吊り橋だった神代橋の改架中は、歩行者はあの深い谷の絶壁を下りて、飛び石伝いに川を渡ってまた九十九折の道を登った。梅見で一汗かいたのだが、上流の寒さが水量を少なくしていたであろう。手の切れるような水だった。まだマンションがあのに見当たらなかった時期の話だ。

一時期、多摩川河口の大森に住んだことがある。夏になると「羽田国際飛行場」の屋上にビアホールが出来た。毎晩日参したが、どこを向いても菜の花畑ならぬ海苔ヒビ(海苔養殖用の江戸川産の篠竹)だらけだった。河口に続く海の水質悪化は昭和三十年代の初めから始っている。

こんな取り止めのないことをいくら書いてもキリがない。私はかねてから多摩川の歴史的環境の変遷を考えている。その一つが右岸の里山と川が豊かな「多摩の横山」と、左岸の名うての乏水地帯である「武蔵野」との人文的対比とその理由。二番目は多摩川流域で「海」に最も近い地点の変遷である。ただしこの場合の「海」とは相模湾沿岸を指す。文化の伝達の唯一の方法であった手漕ぎまたは簡単な帆船で、太平洋岸から東京湾に入ることが中世までは至難の技であったということが踏まえての発想である。言いかえると古代には府中が相模湾に最も近かったということである。この意味で江ノ島を河口とする境川と、八王子の南に連なる津を持つ相模川の二つの川と多摩川との関係に私の関心が注がれ続けるのである。

環境雑感

■景相生態学と流域環境の保全管理計画 — 生き物すみわけ・共生論としての ランドデザイン手法の確立 — ■

田畑 貞寿

流域の自然環境は、人間を含めすべての生物が生存する、環境としての自然、衣食住等、人間にとって有用な、資源としての自然・緑、人間の精神的、文化的側面を持つ、文化としての自然環境など、総合的な環境保全を科学的に捉える必要がある。その方法としては、沼田真編による景相生態学（ランドスケープ・エコロジー入門）が詳しい。景相とは従来、景観と云う言葉で表現されてきた概念であるが、環境の総合像であるはずの景観が、ややもするとその視覚的側面だけに限定され、表面的に処理される傾向もみられることから、こうした傾向を是正し、景観の本来の概念を、より明確に言い表す言葉として使われている。従って視覚だけでなく、聴覚、臭覚、触覚、味覚なども含め複合する形で成り立っている。このような、五感を通して空間を総合的な環境の相関で捉えられる形態である。この方法による景相生態学から見た、流域の保全管理計画を構築することが必要とされている。

筆者らが行なった多摩川流域関連の調査研究では、1971年に実施した多摩川流域環境調査、1977年の河川合流域からみた多摩川流域の適正土地利用とその制御に関する研究、1994年の地域構造の変容と水利システムの再編化に関する研究、2000年の水源林地帯を主体とした多摩川流域の解析評価と環境管理に関する研究などがある。これらの調査研究の目的は、流域の環境管理のための評価区分に必要な構成要素の資料収集とマトリックスによる要素間の価値評価、その手法の開発、また流域の土地利用のなかで、河川合流域の生物相の調査から河川合流域の自然のポテンシャルが高いことなどについて知見を得るなど、野外調査から関連する諸資料を得ることができた。さらには河川中流域周辺の土地利用の変遷にともなう用水の変容過程と、再編化についてランドスケープデザインの手法の開発を行なっている。

近年では、河川上流域の自然環境の安定化と総合的環境管理のための基礎地図情報の作成とモニタリング調査を実施している。今後流域全体の環境保全管理計画構築

のために、基礎地図情報作成から流域の総合的環境保全とその事業推進の諸資料になればと考えている。

以上の一連の調査研究は、造園学や景相生態学からのアプローチによるものである。もう一つこの調査研究から気のついたことに、私たちの住むまちで、自然的営力によって維持されている林や森や地形景観を見ることが少なくなっている。市街地では、ほとんど見られない。このような地域で自然環境を維持管理するためには、人為的営力によらなければならない。しかし、自然と共生する地域とは、この自然的営力によって維持されてきた水系、河岸段丘、自然地形と自然作用が一体となっている地域で、野生生物の生息が見られる場所「自然地」があげられる。この自然地は、どこの地域でも帯状または島状に分布している。その帯状と捉えることのできる一つに河川流域をあげることができる。その河川流域も、日本の近代化100年のなかで、この自然的営力によって自然環境が維持されてきた地域も、大きく改変され、失われた「帯状自然地」も多い。これらの自然地の保護管理計画と流域全体の景相生態学を前提とした、生き物のすみわけ・共生のしくみと、ランドデザイン手法の確立、その実践が必要となっている。これを推進するには関係する流域の市民、地権者、NPO、専門家、関係自治体等の積極的参加が問題解決への第一歩となっている。

筆者プロフィール

田畑 貞寿 (たばた さだとし)

千葉大学名誉教授、工博（東京大学）、上野学園大学教授、
(財)日本自然保護協会理事長

■略 歴

1931年生まれ。千葉大学園芸学部造園学科卒業、東京都入庁、日本住宅公団、東洋大学工学部講師、千葉大学園芸学部教授等歴任

■専 攻

造園学・環境計画学

■主な著書

「都市のグリーンマトリックス」(著) 1979年(鹿島出版会)
「緑と居住環境」(共著) 1984年(古今書院)
「緑の環境デザイン」(編著) 1985年(日本放送出版協会)
「乾燥・半乾燥地域の都市化と緑地生態系の動態に関する研究」
(編著) 1991年(千葉大学)
「市民ランドスケープの創造」(編著) 1996年
(環境コミュニケーションズ)
「緑資産と環境デザイン論」(編著) 1999年(技報堂出版)
「緑と地域計画」(著) 2000年(古今書院)

財団からのお知らせ

〈研究助成報告書完成〉

助成集報第31巻（2002年度）並びに多摩川環境調査助成集第24巻（2002年度）が完成しました。研究の概要は当財団ホームページをご覧ください。報告書は財団へお越し下されば貸し出しいたします。

助成集報第31巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
多摩川水系の貝類からみた自然環境の現状把握と保全に関する研究	黒住 耐二	千葉県立中央博物館 学芸研究員
高精度測定法による多摩川水系の水収支・物質収支の動態把握と河川水質形成機構の解明	大森 博雄	東京大学大学院 新領域創生科学研究科 教授
多摩川流域における蛍光増白剤の分布と挙動	高田 秀俊	東京農工大学農学部 助教授
内分泌攪乱物質による多摩川流域の土壤動物汚染の解明：環形動物貧毛綱「ミミズ」を指標に用いた解析	蒲生 忍	杏林大学保健学部 教授
酸化チタン光触媒による多摩川の水中の外因性内分泌攪乱化学物質の分解に関する研究	藤嶋 昭	東京大学大学院工学系 研究科 教授

多摩川環境調査助成集第23巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
環境教育、特にフィールドマナーの視点から捉えた多摩川の保全に関する研究	君塚 芳輝	淡水魚類研究者
多摩川中流部（本流）における子どもの川遊びと水辺行動についての実態調査	上田 大志	多摩川センタースタッフ
市民のための多摩川環境情報提供システムとその活用のあり方に関する調査研究	鈴木 聖子	エコロジカル野川実行委員会
住民の眼で見つづけた多摩川の30年：蓄積データ解析による自然の変遷と自然観の変化についての研究	柴田 隆行	多摩川の自然を守る会代表
多摩川の源流に位置する奥多摩御前山における自然水とし尿の調査研究	山本 久子	東京都山岳連盟・自然保護委員会
地質野外実習地としての多摩川中流域および狭山丘陵に分布する上総層群の露頭の現状とそれに基づく教材開発	馬場 勝良	慶応義塾幼稚舎 教諭
多摩川流域の石垣調査	岡崎 学	羽村郷土研究会代表
多摩川源流部の淵・滝・沢・尾根等の地名とその由来に関する調査研究	中村 文明	多摩川源流研究所 所長

〈寄贈文献の紹介〉

● 「大栗川・乞田川 流域の水と文化」

著者 小林宏一 2003年 自費出版

著者が大栗川・乞田川流域をくまなく踏査し、多摩ニュータウン開発以前の状況を資料・聞き取り調査に基づいて現況との比較、変遷について、1章「ふるさとの川」、2章「谷戸の今昔」、3章「流域の自然」、4章「流域の文化」（信仰・石物・石塔・行楽）、5章「水と暮らし」（水の恵み・水の災い・水を祀る・水の地名・水と民話）に整理しまとめている。

● 「市民環境科学への招待—水環境を守るために—」

著者 小倉紀雄 2003年 (株)裳華房

2部構成で、第1部は「水環境における物質循環と人間活動」をテーマに水の性質、水の循環、水資源、水質汚染、地下水・河川・湖沼・海洋等について平易に解説している。第2部では「市民環境科学の招待—水環境の保全と再生に果たす市民の活動—」をテーマに著者が市民グループと河川の水質浄化等の環境問題に長年取り組んできた実践活動についてまとめている。

首都圏における多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究、募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 横田二郎）は、昭和50年度より多摩川およびその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に429件の研究に助成金を交付し、369件の研究成果が完成しています。

平成16年度も従来と同様、意欲的な研究を募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

- ① 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- ② 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- ③ 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査、試験研究
- ④ 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査、試験研究

3. 応募方法 当財団所定の申請用紙をご請求（返信用切手200円同封）され、学術研究・一般研究いずれかを選択して、ご申請下さい。当財団ホームページからも入手できます。

4. 助成の決定 平成16年3月の当財団選考委員会にて選考のうえ、理事会で決定。

5. 研究の種別

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の性格	環境問題改善のための調査研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。	環境問題改善のための調査研究で、一般の市民が、特別の学識経験を必要とせず取り組めるもの。
	(財団の過去の事例を参照)	
1件当たりの助成金総額の上限額	600万円	300万円
単年度の助成金上限額	300万円	150万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目	(1) 器具備品費	原則対象外。ただし、所属機関・個人所有もなく研究に必要不可欠な物品で選考委員会で認められた場合に限る。
	(2) 消耗品費	調査研究に用いる各種材料、部品、薬品等。
	(3) 旅費	調査研究のための交通費、宿泊費等。
	(4) 謝金	調査研究のために臨時に雇った人の謝金等。
	(5) その他	機器・備品等の借料、通信費、その他。

6. 公募締切日 平成16年1月15日

※応募についての詳細は、財団事務局にお問い合わせ下さい。

- 発行日 平成15年12月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03) 3400-9142
FAX (03) 3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuev>

*印刷所 雄文社 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125

